

モラリストの革命性 — ヘルマン・ケステン文学のモラリスト像 その三 —

武 田 良 材

1 ケステンの革命

1-1 反共産主義

1933年にドイツから亡命した作家たちの彷徨は、必ずしも1945年で終了したわけではない。亡命を選択した作家がナチス・ドイツの国民だった人たちのもとへ帰るのは容易でなく、ヘルマン・ケステンは戦後さらに半世紀も生きたが、「永遠の亡命」を選択している。

ケステン編集の『私は連邦共和国では生きない』¹は、多くの作家、哲学者たちから、表題のテーマについての意見を集めたもので、「何で私が連邦共和国で生きなきゃならないんだ？」

(Ossip Kalenter) とたった一文で忘れたものもあれば、丹念に思いを綴ったものもあり、60年代の鬱屈気を今に伝えている。さらに序文では、もはや意見を発することの出来ない者たち、即ち暗殺された者や自殺した者たちのことが積極的に取り上げられていて、亡命文学を俯瞰できる興味深い資料となっている。テーマがBRDということでDDRについての言及が少ないのはもちろんだが、この本の中でケステンは「人民の裏切り者ウルブリヒト」、「独裁国家」と切って捨てる。要するに、生きたくないを超えて、そこでは生きられない国、それがDDR及びソ連のイメージであった。

反共産主義は、Rohrwasser が論文「ヘルマン・ケステンと『一本調子に辛らつな反共産主義』」で、² この反共産主義と反ファシズムが本質的には反全体主義という同じ根を持つことを解き明かすなど、ケステンを語る際の重要トピックの一つである。タイトルに引用された「一本調子に辛らつな反共産主義」³ は親友クラウス・マンのケステン評で、マンはケステンと共に反ファシ

¹ Kesten, Hermann: *Ich lebe nicht in der Bundesrepublik* Ulm 1964. 「永遠の亡命」はこの本の序文のタイトル。

² Rohrwasser, Michael: Hermann Kesten und der „monoton grimmige Antikommunismus“ In: Fähnders, Walter / Weber, Hendrik (Hrsg.): *Dichter · Literat · Emigrant* Bielefeld 2005, S.193-215.

³ クラウス・マンは日記に1935年3月12日付でこの言葉を書き付けている。マンはスターリン主義はファシズムほど危険ではないと考えており、それでその二つを全く同列に扱う態度に対して否定的表現を用いたものと考えられる。以下を参照のこと。Rohrwasser, S.20. およびクラウス・マン『轉回点』(小栗浩 他訳)

ズム・反スターリン主義の「自由なプレスと文学の連盟（亡命ドイツ作家およびジャーナリスト連盟）」に属し、従って基本的にはケステンの考えを理解していた筈なので、この言葉はケステンの反共産主義がひどく頑なであったことを物語る。

1-2 革命への愛憎

とは言え、亡命文学者たちの多くがそうであったように、ケステンは左翼的であった。評論で社会問題を取り上げては漸次的改善を要求するという意味では社会改良主義的な考えの持ち主なのだが、それでいて肯定的な意味合いで「革命」に言及することも少なくない。エッセイ集『辛抱強い革命家たち』の序文で、自らの革命への愛憎が説明されている。「子どもの頃、革命の物語を読んでいるとき、私はいつも革命家たちの側に立っていた」⁴と語るように、元来革命的な事柄に共感する性格であったが、1919年のニュルンベルクでデモが弾圧されるのを目の当たりにする。ニュルンベルクではこの年の二月にシュパルタクスブントからドイツ共産党の地方支部が成立し、社会民主党と競い合っていた。目立ったものとしては四月にはレンガ労働者が二千人規模、また別の機会には四千人規模のデモを行うなど、労働運動が盛り上がりを見せていた。⁵彼はそうしたデモの一つで、受身に参加した人たちまでもが弾圧の犠牲となる光景に衝撃を受けた結果、革命のもたらす犠牲を意識するようになったという。前年の1918年に父親が野戦病院で死亡したこともこうした受け止めに影響を与えたはずである。

私は抑圧されている人たちの側に立つことを、弱い者や貧しい者、不当な扱いを受けた少数派、収奪された多数派、並びに犠牲にされた個人と民衆の側に立つことを決してやめなかったが、あらゆる革命に共感する支持者であることはやめた。⁶

こうして大学で学び始める十代終りの多感な時期に暴力革命を拒絶する姿勢が固められた。もっともそれは犠牲を許容する戦略に対する拒絶であって、抑圧されている人間を救いたいという革命の原点にある志は評価し続けた。⁷一例を挙げれば、彼を含めた三人の若者たちによる「ユダヤ人三頭政治」で知られたグスタフ・キーペンホイアー社は1932年にマルクスとエンゲルス

晶文社 1986年、393頁以下。

⁴ Kesten, Hermann: *Revolutionäre mit Geduld*. Percha 1973, S.8.

⁵ Fein, Egon: *Hitlers Weg nach Nürnberg*. Nürnberg 2002, S.64.

⁶ Ebd., S.9f.

⁷ ケステンは皮肉な調子で『資本論』やマルクスに言及することが多いが、その皮肉はそれ自体ではなく、常に『資本論』を聖書に、マルクスを教祖にしてしまう教条的姿勢に向けられている。

の『資本論』廉価版を出版している。⁸ それ以外にも、ケステンは前述のエッセイ集のように彼独特の判断基準で革命家とみなした人物たちに言及することが多く、本質的に革命支持者なのは事実である。

1-3 ベッヒャー非難に表れた革命家の自負

ケステンの革命への共感が対立を引き起こすのは、とりわけナチス・ドイツが崩壊して後のことである。エッセイ「四分割された文学」⁹で、戦後ドイツ文学は四分割された、即ち西ドイツの作家、東ドイツの作家、亡命作家、そしてナチス作家に分かれたという見方をケステンは示しているのだが、戦後の文学状況の中で彼にとってとりわけ不満だったのは、東ドイツの文学がソ連共産党の政治的な圧力の下に置かれたことであつたはずである。というのも、亡命文学の擁護者であつた彼は、確かにその他の西ドイツの文学状況にもナチス作家たちにも大いに不満を抱いていたには違いないが、¹⁰ 特に東ドイツに関しては文化相ヨハネス・R・ベッヒャーに宛てた公開書簡からその憤りの苛烈さを推し量ることができるからである。

ベッヒャーと諍いがあつたのは1957年のことである。前年のソビエト共産党第20回大会でスターリン批判が行われ、それを受けてハンガリーでは1956年10月に民主化を求める暴動が起きていた。ここで論争の種となつたのは、ベッヒャーが大臣という要職にある東ドイツで、ヴォルフガング・ハリーヒやヴァルター・ヤンカといった文化人たちが投獄されていた問題である。ウルブリヒト政権の打倒を企てた罪でハリーヒには懲役十年、ヤンカには五年の判決が下されたが、この判決は東西ドイツが統一された1990年に破棄され、現在ではスターリン批判に依拠した政治改革を封じるための見せしめ裁判として知られている。¹¹ DDR指導部によってスケープゴートにされた者たちを、作家である文化相が救おうとしないことにケステンは批判の矛先を向けたわけだが、党の見解・方針に忠実なベッヒャーに向けられたケステンの非難の言葉から、ベッヒャーとは全く対照的なケステンの人格が浮かび上がる点に注目したい。

⁸ Landshoff, Fritz: *Amsterdam Keizersgracht 333 Querido Verlag*, Berlin 2001, S.25. 『資本論』はナチスが政権を取る前月に出版され、旧キーペンホイアー社の最後の出版物となっている。ケステンがこの出版を主導したわけではないにしても、彼の支持なしには行い得なかった。

⁹ Die gevierteilte Literatur (Berlin 1952). In: Kesten, Hermann: *Der Geist der Unruhe*. Köln / Berlin 1959, S.116-134.

¹⁰ 「四分割された文学」の中では、ベルリンの文学面での惨状を嘆き、「かの『47年グループ』または碌でもないハンス・グリム・グループまたはペン・クラブまたはアカデミーまたはミュンヘンの『巨嘴鳥座(トゥカン)』といったグループを形成することは(戦前の文学的なカフェの: 訳者註) ささやかな埋め合わせに過ぎない」(Ebd. S.133) と不満を表明している。

¹¹ フンボルト大学講師のハリーヒとアウフバウ社社長ヤンカは1956年のハンガリー革命直後に投獄されている。以下を参照のこと。

ヴァルター・ヤンカ『沈黙の壁—暴露された東独スターリン主義』(林功三 訳)、平凡社 1990年。

ケステンは亡命中、作家たちが共産党と関係があるかどうかを不問に付し、ただヒトラーに反対であるかどうかを基準に、ベルトルト・ブレヒトやベッヒャーらの著作を出版し、ひどく仲の悪かったブレヒトのアメリカ亡命も緊急救助委員会の名誉顧問の立場から支援しており、またそれを自慢にしていた。公開書簡ではそうした実績を掲げてベッヒャーを攻め立てている。

ベッヒャーという反動的な独裁の官吏は、依存するところのない作家である私のことを、「革命的な信念が全然ありそうにない」と語った。真実が革命的であることを、我々の世界では、党、国家、大衆、流行の精神、「時代精神」のスローガンに付き従わない自立した作家が革命家であることを、彼は知らないのだろうか？ 私は公の場で恐れから言葉を飲み込んだことは決してない、公の場で恐れから完全には私の考えでないことを書いたりも決してしていない。私の良心にやましいところはない。¹²

ケステンとは頑固な保守主義者に見えなくもないが、共産党¹³を完全に敵に回した上で、さらに「自立した作家」、即ち彼自身のような作家、あるいは亡命作家が「革命家」だと宣言する大胆さを持ち合わせていた。彼の自負においては、いわゆる社会主義・共産主義が反革命で、彼こそが革命家だった。

1-4 自立と革命の問題

ところで拙論で二度にわたり論じてきたように、¹⁴ ケステンの文学世界において一貫して中心テーマを成すのはモラリストである。このモラリストは、『幸運児』のアモローソに代表される世渡り上手なカサノーヴァ的女たらし、および『ヨーゼフは自由を求めている』のヨーゼフ・パールに代表される不可能な理想に向けてまっすぐ歩み続けようとする不器用な「はみ出し者」あるいは「いかさま師」の分析を通じて明らかにしたように、周囲の人間を死に追いやろうとも理想の実現に向けて我が道を歩み続ける徹底的に自立した存在である。「自立した作家が革命家である」ならば、ケステンのモラリストはソ連の赤旗の下に集う革命家に代わる真の革命家に位置付けられそうである。

¹² Zweite Antwort an Johannes R. Becher (25. September 1957) In: *Der Geist der Unruhe*. (wie Anm.9), S.285-288, hier S.287.

¹³ DDRで政権を握っていたのはドイツ社会主義統一党 (SED) だが、本稿ではソ連共産党およびその指導の下にある党をまとめて共産党と表現している。

¹⁴ 拙論「道徳的な女たらし」および「モラリストへの成長」：京都大学大学院独文研究室『研究報告』それぞれ18号(2004)および19号(2005)を参照のこと。その中で『ヨーゼフは自由を求めている』(1927)、『はみ出し者』(1929)、『いかさま師』(1932)、『幸運児』(1955)といった小説を主に論じている。

しかしながら、実際に小説に登場するモラリストたちは、人類を救おうという意志と、そのための幾分かの才能は持ち合わせているにしても、その影響力はきわめて限定的であると言わざるを得ない。それでは共産党の追従者に代わる、自立した作家の革命性、あるいはモラリストの革命性を、ケステンは文学作品の中でどう表現しているのだろうか。要するに彼のモラリストは何をなし得るのだろうか。

本稿ではモラリストと共産党の活動家の対比が描かれた長編小説『あるモラリストの冒険』を手がかりにケステンのモラリストの革命性について考察するが、本題に入る前に次節では、この小説が出版された 1961 年当時のケステンの心境を物語る事件を紹介しておきたい。

1-5 ミラノ事件に見る党派への敵視

すでに見たように、ケステンの共産党への反発は若い頃から抱かれていたもので、とりわけブレヒトとの相性の悪さは、編集者と作家の関係であった亡命初期からすでに顕在化していた。¹⁵ さらに戦後のブレヒトについては、「ヴァイマル共和国時代のブレヒトと亡命中のブレヒトは、ウルブリヒトのために『ルクルス』を書き換えるブレヒトと同一ではない」¹⁶ と記すなど一層の反発を示していた。人気作家ブレヒトに対するそうした態度は反発を招かないわけにはいかなかった。そこに生じたのがウヴェ・ヨーンゾン研究の中でケステン事件と呼ばれるものである。

1961 年 11 月 10 日、ミラノでイタリアの出版人ジャンジャコモ・フェリトリネッリ主催の討論会が開かれ、ケステンはイタリア語でスピーチを行った。そのスピーチの中で同年 8 月に東ドイツがベルリンの壁を築いたことに関連して、ブレヒトを独裁国家の召使、ゴットフリート・ベンを比類なく機知に富むファシストと罵り、聴衆の反感を買ったと伝えられている。¹⁷ 会に参加していたヨーンゾンもまたそのスピーチに驚き、その場で通訳を立てて反論を行った。ヨーンゾンは壁の建設という歴史的事態を文学の問題としてモラルに絡めることに不快感を示し、ブレヒトは独裁国家に仕えたことはなく独裁国家の中で生き、そこで生き残ることを実践して見せたのだと反論した。主催者フェリトリネッリはケステンに反論の機会を与えなかった。

ケステンはこのミラノ事件を「どうして彼はミラノでウルブリヒトのように話したのか？」と

¹⁵ Rohrwasser, a.a.O., S.200f. ブレヒトはケステンが行った原稿審査に不満を露わにしていた。

¹⁶ Kesten, Hermann: *Fikalen des Parnass* Frankfurt am Main / Berlin / Wien 1984, S.226.

¹⁷ ブレヒトとベンは事件より前の 1956 年に亡くなっている。スピーチ原稿が公開されていないので、実際どのような言い回しがなされたかわからないが、同時期の発言から同様の非難の言葉を紹介すると、「ベンとブレヒトとエンガー、ヒトラーとスターリンの殺人独裁の三人の獨裁者詩人たちは、ドイツの闇の時代の直後に未成熟な詩的若者たちの誘惑者であった。」(Ebd., S.233) というものがある。この引用箇所では、1950 年代にも活躍した彼らの文学に、ケステンの目から見て、真実と向き合う誠実さが欠けていたことが刺戟されている。

いう記事にまとめ、それを『ヴェルト』誌に掲載した。ケステンはヨーンゾンの反論を、当然オリジナルのドイツ語で聞いただろうが、「彼」、即ちヨーンゾンが壁をモラルに反しないものとして擁護したと誤解していた。ヨーンゾンはその時の録音テープを入手して、ケステンの記載とのずれを逐一指摘することで名誉回復を果たしたが、ヨーンゾンがテープを発見して反論するまでの期間、そして反論後もしばらくは証拠テープの信憑性への疑いから、真相が問題となった。これが事件の概要である。¹⁸

有力紙に人気作家を中傷する記事を掲載できるケステンの影響力の大きさや、その内容に窺われる偏屈さ、さらにプレヒトに代表される共産党系の作家および47年グループとの対立¹⁹ など、いろいろなものを背景にした事件だが、ここで注目したいのは彼の党派に対する敵対意識の頑なさで、評論集『不安な精神』の序文には次の言葉が見られる。

これらの評論は一瞬の激情の中で、党派との闘いの中で、しばしば私とは無縁な人々を苦しめた不正を感じて書かれた。

私は一度も党派に属したことがなく、いつも党派を攻撃してきた。私は人生にも書くことにも当てはまる原則をいつも探している。²⁰

Rohlwasser が結論する通りケステンの反共産主義は専制への反発に由来するのだろうが、²¹ その反共産主義が具体的には共産党に向けられていること、および引用で表明されている立場からすれば、必然的に専制を生じさせる党派への反発をより根本的なものとみなすべきであろう。共産主義的作家たちに向けられた「私はサタンと闘うためにベルゼブブと手を結んだりはいない」²² というキリスト風の言葉でも、悪とも手を結ぶという妥協に非難の重点が据えられている。勿論このこだわりがあつてこそ、彼は徹底した個人主義者たるモラリストに高い価値を見出すのである。

個人主義者と党派に依存する人間の対比をケステンの小説群から見つけ出すことは容易で、典型的なものとしてヨーゼフ少年と社会民主党の国会議員となる父や、作家ムーズィークと宣伝省

¹⁸ ケステン事件については以下を参照のこと。Neumann, Bernd: *Uwe Johnson*. Berlin 2000. S.461-474. Fahlke, Eberhard / Fellinger, Raimund (Hrsg.): *Uwe Johnson - Siegfried Unseld Der Briefwechsel*. Frankfurt am Main 1999. 所収の1961年11月17日付書簡。

¹⁹ 47年グループについては、作品の評価におけるアンデルシュの専制、綱領の欠如、ナチス・ドイツの下で教育を受けた者たちが「白紙（タブララサ）」からの出発を標榜していることなどを批判していた。

²⁰ *Der Geist der Unruhe*, S.12.

²¹ Rohrwasser, S.215.

²² Kesten, Hermann: *Dichter im Café*. München 1965, S.72.

次官ルストといった組み合わせが挙げられる。しかし本稿では、あくまでもベツヒャーへの公開書簡やヨーンゾンへの中傷で問題となった共産党とのかわりに限定し、モラリストという個人主義者と、共産党の活動家との関係の描かれようを分析することにする。

2 長編小説『あるモラリストの冒険』²³

2-1 モラリストと共産党活動家の対比

『あるモラリストの冒険』はドイツ文学研究者のアバンチュールを描いた小説で、若い男女が1932年に知り合い、1946年に大学教授と出版社社長夫人として再会し、1961年によく一緒にいる約束をするまでの物語である。

慌しく様々な事件が起きる中で、とりわけ重要な意味を持つのが1932年のダンスパーティで起きた暗殺事件と、共産党のスパイとしてNSDAPを探っていた女性が拷問死した1934年の事件である。

アメリカ出身のフランシス・マークはベルリン留学中にアメリカ人シルヴィアと愛し合うようになる。共産党細胞にオルグされたシルヴィアは共産党系の夏のダンスパーティに招待され、彼女の誘いでマークもついて行ったところ、彼の隣のテーブルにいたナチス支持者が暗殺され、シルヴィアと公然の恋人、給仕のピッポーがマークの家に逃げ込む。マークは無実で、暗殺の瞬間に凶器を取り出した共産主義者ピッポーが犯人と疑わしいのだが、シルヴィアはピッポーを逃がし、あべこべにマークが殺人容疑で二週間もの取り調べを受ける。その後、マークは未亡人ルートに支えられてベルリンで充実した研究生活を送る。彼に知られることなく共産党の地下活動を担っていたルートは、1934年にスパイとしてナチスに逮捕されて命を落とす。マークはパリで活動するシルヴィアを訪ねてルートの死を伝えた後、アメリカに帰国し教授になる。以上がこの小説の根幹である。

フランシス・マークあるいはフランツ・マルクの名は表現主義の画家フランツ・マルクと同じで、²⁴ 新即物主義の作家ケステンがそれを意識しなかったはずはないが、特に似たところはなく、むしろチェコスロバキア大使として北京に駐在した他、ワシントンやストックホルムに勤務したことのあるフランツ・カール・ヴァイスコプフと関係があるようだ。というのもマークと同じフランツの名を持つ、フランツ・シュヴァルツバハという、ヴァイスコプフと似た人物が共産党活動家として登場し、後にチェコスロバキア大使としてワシントンおよびローマに赴任するからである。シュヴァルツバハはスターリンへの批判を彼自身への攻撃とみなす本格的革命家で、マー

²³ Kesten, Hermann: *Die Abenteuer eines Moralisten*. Frankfurt am Main / Berlin / Wien 1982. この本からの引用については〔 〕内に頁数のみを示す。

²⁴ Franz (Francis) Mark と Franz Marc.

クとはタイプが異なるのだが、[23] 聞き手を混乱させるかのように、どちらも単に「フランツ」と呼ばれたり、²⁵ 「聖なるフランツ」と「聖ならざるフランツ」または「フランツⅠ」と「フランツⅡ」²⁶ と呼び分けられる。また、1961年のシュヴァルツバハはプラハに帰国して粛清に身を委ねるか、ニューヨークに逃亡するかを選択を問われており、スターリン批判以降の政治情勢に翻弄されている。注目されることのない小品だが、共産党との対比でモラリストが描かれている点が興味深い。

マークは1912年生まれ、若くして教授となる天才で、小説の舞台の1961年には研究者としては時代遅れと見られているものの、教え子たちは皆、「彼はこの世で最も善い人だ」[16]と口をそろえる。彼をモラリストと規定するのは基本的にシルヴィアで、本人はそうした自負を抱くどころか、逆に無力さを自覚している。彼の愛する二人の女性、シルヴィアとルート、さらにそれぞれの恋人ピッポーとシュヴァルツバハらが皆、同じ共産党細胞に所属し、殺人事件の現場となるパーティーも共産党系、NSDAPに入っている者も共産党のスパイというように共産党一色に染まった人間関係の中で、マークは決して周囲に同調することなくドイツ文学研究に没入する。このモラリストと共産党活動家との対比、このような男をありのままシルヴィアとルートが受け入れ、彼に献身するという、矛盾を感じさせる状況がこの作品の見所である。

2-2 共産党への疑念

これはケステン基本的なスタンスだが、共産党はマークの視点を通じてNSDAPと同列に扱われている。例えば暗殺されたナチス支持者は、共産主義者の兄弟と一緒にパーティーに参加しているし、マークを殺人犯と疑うルートとの間には次のようなやり取りがある。

「だけでもしあんたがそれをやったんだとしたら、それは殺人じゃないでしょ。あんたは理念をもってやったことになるんだから。あんたはナチスを一人殺したことになるの。ドイツをこのペストから開放するには、それはひょっとすると一番確実な方法ではないかもしれない。だけどこうした手合が少なくなればなるほど・・・」

「なんてこった、あんたは奴みたいなお口振りじゃないかも」

「シルヴィアみたいってこと？」

²⁵ シルヴィアは「フランツ」と言ったあとで、「わたしが言ってるのはシュヴァルツバハのことよ」などと付け加えるという面倒なことを繰り返す。なお、この小説には同じ名前が他に三組登場するが、これらはフランツとは違い、単にケステン流のユーモアと解釈できる。

²⁶ 神聖かつⅠなのは共産主義者の方である。マークが聖ならざるのは、自らの手で全世界を救いたいと考えているからである。[100f]

「違う。ナチだ。」[52]

共産党とNSDAPを同列に扱う姿勢は、この小説の中ではモラリストの曖昧な態度とみなされる。シルヴィアは取り調べの際にマークについて次のことを証言したと告白する。

「あんたが無実だってこと。＜中略＞あんたが人類を愛してること。あんたがモラリストだってこと。あんたが私がこれまで会ったどのアメリカ人よりも善い人だってこと。あんたが私に話したことによれば、あんたは国民社会主義者を実際には憎むことができなくて、誰をも憎みたくないから、憎む意思がないこと、だけど国民社会主義者が人類を踏みにじる前に、それはもうすぐだろうけど、彼らと対決しなければならぬということ。立場を表明して彼らと対決しなければならないこと、行動しなければならないこと、＜中略＞もしあんたが犯行を行ったのだとしたら、あんたは悪意や殺意や憎しみ抜きに、立場を表明するためだけに、ようやく行動するためだけにそれを行ったんだってこと。」[61]

これによれば、殺人を行わなかったマークは何ら行動を起こしていないことになる。しかし、シルヴィアはさらに、「大抵の人はモラリストは何でもやりかねないと信じてるの。」[62]と、モラリストの問題に還元してマークを慰める。

世界をよくしたいという意思を持ち、その一方でドイツ文学という共産主義者から見れば「相当役立たない分野」[87]を研究しているマークは、活動家シルヴィアとの論争で優位に立ちようがない。彼は自ら負けを認めるのだが、その状況は彼の思想が作者ケステンとそっくりなだけに皮肉である。そこにモラリストの限界についてのケステンの自覚が表れていると言えるだろう。しかし、別の選択肢を選び得るわけでもなく、ケステンは無難にこの場を収める。論破はオルグの一ステップであってしかるべきだが、シルヴィアはマークという人格を変革しようとはせず、ありのままの彼を受け入れ、彼を愛す。

しかし、彼が負けを認めるのは、彼自身が政治的な実践に踏み出していないことを後ろめたく思っているからに過ぎない。これだけ活動家たちに囲まれながら決してオルグされることのないマークには彼なりの共産党批判がある。それはケステンの党派への疑念を反映し、共産党の官僚主義に向けられていて、その内容はシルヴィアが「あんたの疑念は知ってるわ。人間はその進歩の代価を犠牲者たちの血で支払うべきじゃないってんでしょ。」[86]と、犠牲を巡る素朴な議論に持ち込んだ際に明らかとなる。

「一人の犠牲で一つの都市を救える場合に、あんたはその命を節約して十万人を駄目にするの？」

「じゃあ君たちは一つの都市を救ったことがあるのか？ 君たちはレートを犠牲にした。何のためだ？ 君たちの秘密活動ごつこのためじゃないのか？ 何かが実行されたらモスクワに報告するためじゃないのか？ 上層部に書類を提出するためじゃないのか？ 機関誌を埋めるためじゃないのか？ 編集部を正当化するためじゃないのか？ それとも君たちは、人類を救うためだ、と主張するのか？」[86]

このように立場の相容れないのマークについてシルヴィアは、彼は善良だ、という以上の評価を口にすることがない。世渡り上手で異性としての魅力も優れているピッポーとシュヴァルツバハもまた善良なのだが、この二人に対抗し得るマークの魅力について語られることはない。そのことから、シルヴィアのこの三人に均等に配分される愛は、三人それぞれの何を愛しているかではなく、この三人を等しく愛していることに意味付けがなされていると考えられる。即ち三人の人間としての価値の等しさを描き出す道具と言えるだろう。

2-3 戦後の再会

アメリカで大学教授となったマークは 1946 年に偶然ニューヨークでシルヴィアと再会する。出版社社長ミドルウェイの妻で、娘が二人いる彼女は、もしマークが結婚してくれるのなら離婚し娘たちと別れることも辞さないと夫に告げる。夫は伝言役を引き受け、「わたしは、と彼女が言ったんだが、この人のものなの。彼はわたしがこれまで出会った中で最も高貴な人よ。彼はモラリストなの。」[94] と、マークに彼女の熱烈な言葉を伝える。一方、シルヴィアはこの物分りのよい夫について、「型がなくて、偉大な男に育つ素材じゃない」[123] と評し、彼が他の三人の恋人たちと同列に扱われることはない。

シュヴァルツバハはチェコスロバキア大使としてワシントンに居り、ピッポーはギャングのボスとしてニューヨークで活躍し、ミドルウェイ氏の命の恩人として、²⁷ 夫妻と親しい関係にある。ここでマークの家にピッポーを匿うという 1932 年の出来事が再現される。

この 1946 年の再会を扱った箇所は短くなく、そこで語られる事件も盛り沢山だが、基本的にはシルヴィアと三人の恋人たちとの絆が舞台をアメリカに移しても尚維持されている様子を描いた箇所であり、本稿では以上の紹介にとどめる。

²⁷ 正確には、ある作家のミドルウェイにとって命のように大切に思われた原稿を強盗から買い戻してくれた恩人。

2-4 曖昧な結末

それから15年間、マークは同じニューヨークに住みながら、ミドルウェイ夫妻との接触を避ける。しかし、シルヴィアは改めてマークとの結婚を望み、承服出来ないミドルウェイ氏のために、ローマにてピッポー、ローマ駐在のシュヴァルツバハ大使を加えた五人の会合が持たれる。

ミドルウェイは「モラリスト」に妻を奪われるのを恐れ、「理想主義者」シュヴァルツバハに助けを求める。「他の誰がわたしを救えますか？ シルヴィアはあなたを尊敬しています。あなたは理想主義者だ。理想主義者は女たちにとって、骨董品の鈍い輝きみたいなもので、何やら感動的なものだ。あなたは理想主義者で、しつこくない、このマーク教授みたいにモラリストであるわけではない。」[165]と、ミドルウェイは語ったとされる。理想主義者との比較でもってモラリストの価値が問われる決戦の時が到来したかのようだが、この場の主役はマークではない。

根っからの共産党活動家シュヴァルツバハは自由の実現のために全てを犠牲にしてきたにも関わらず、チェコスロバキア社会主義共和国よりもアメリカ合衆国の方で自由が実現されていることを憂い、それで本国から呼び出しを受けている。帰国すれば処刑されることが予見されるのだが、彼はブラバ行きを決意してその場を立ち去る。

重婚しているピッポーは妻子が逮捕されたところで、シルヴィアが救出に手を貸すと約束すると、その準備のために先に立ち去る。こうしてマークとシルヴィアの問題はまともに議論されないままで、ピッポーの件が片付けば一緒になるということに約束したところで物語が終えられる。

二人のフランツによって、個人主義的闘いを貫くモラリストと、党の指示に忠実な共産党員とが対比されながら、その一方で、彼らの対決は避けられている。具体的には、1932年から1961年にかけての共産党を巡る歴史的イベント、例えば1939年の独ソ不可侵条約、1956年のスターリン批判、同年のハンガリー事件、1961年8月のベルリンの壁建設といった事柄への言及が全くなく、従ってそれを巡る論戦の機会もない。ヒューマニズムに期待するモラリストの立場と、党に尽す革命家の立場は平行線を辿り続け、一方が他方を圧倒する関係としては描かれない。シルヴィアは確かに最後にマークを選択するが、それでも最後までピッポーとシュヴァルツバハのために身を尽すので、この小説の結末をマークの勝利と受け取ることに無理がある。

結局、共産党指導下の革命家に対してケステンのモラリストが優位に立つようには描かれていない。それはベッヒャーへの公開書簡やミラノ事件に見られる、ケステンの共産党系の文学者たちに対する断固たる態度にそぐわないように思われなくもない。それではこの小説をどう受け止めればよいのだろうか？

3 作家の責任

3-1 ニュルンベルク講演での作家論

この小説と同じ時期に、ケステン思想を知る上で欠かすことのできない二つのエッセイ集が出されている。すでに本稿の中で何度も引用してきたが、それは1930年以降、とりわけ50年代の散文を多く集めた1959年の『不安な精神』と、1960年と翌年に発表されたエッセイを集めた1961年の『パルナスの支部』で、前者では政治的状況と文学との関わりが中心に論じられ、ベッヒャーへの公開書簡もその中に収められている。後者もやはり文学と政治の関わりが主題である点は変わらないが、ユダヤ人問題や死刑廃止など文学の枠に留まらない。『あるモラリストの冒険』では歴史的事件への言及が避けられ、政治的な事柄から距離を置く主人公が描かれているが、同じ時期にケステンはエッセイの方では逆に積極的に政治的な発言を行い、特にこの時期の傾向というわけでないが、文学の政治性に強い関心を示していた。『パルナスの支部』で示された政治的な文学の方向性は当然『あるモラリストの冒険』に反映されているはずである。

パルナスとはアポロとミューズの住まうギリシャの山パルナソスで、文壇を意味する。カフェの詩人ケステンは自らの仕事場であるカフェをその支部と呼ぶ。この本は「芸術とモラル、人類愛と自由、不安な精神と文学」²⁸ に関心の向けられた文学論集である。今、何が書かれるべきかへのこだわりが明瞭で、収められたエッセイは「私たちの時代」と「私たちの文学」の二部に分類され、序文の最後では、「作家たちは何を書くべきか？」²⁹ という問いに具体的な答えを様々に提示して見せた後で、このエッセイ集では「人びとが善くそして賢くなること、戦争がなくなること、飢餓が消えること、平和が守られること、理性が勝利すること、愛が芽生えること、ドイツの作家たちがますます善く且つ勇敢になること、ドイツの批評家たちがますますヒューマン且つ進歩的になること、およびパルナスの支部がますます増え、人類がより幸福になることを期待している」³⁰ と、溢れる願いを表明している。『あるモラリストの冒険』もまたこうした期待を担う作品のはずである。

中でも有名な「われらニュルンベルク市民」³¹ は、1961年4月27日にニュルンベルクで開催されたドイツ・ペンクラブ総会で行った講演の中身である。ケステンはペンクラブ会長に就くのは、しばらく後の1972年だが、1960年に60歳を迎えた彼への祝辞を集めた『ヘルマン・ケステン — 友人たちの本』³² には60名を超える著名な文学関係者たちがコメントを寄せていて、このニュルンベルク講演もそうした文壇での彼の大きな影響力を背景にして得られた機会であ

²⁸ *Filialen des Parnaß* S.11.

²⁹ *Ebd.*, S.14.

³⁰ *Ebd.*, S.15.

³¹ *Wir Nürnberger*. In: *Filialen des Parnaß* (wie Anm.9), S.61-88.

³² *Hermann Kesten - Ein Buch der Freunde*. München / Köln / Frankfurt am Main 1960.

ると考えられる。舞台が最愛の街でもあり、ケステンは意気込んでこの講演に望んだことだろう。

タイトルの「われら」には、市民と共に苦しみや罪の意識を分かち合わなければならないという、作家たちへの呼び掛けが込められている。ここで論じられているのは社会における作家の役割である。彼は作家を良心ある、最後のディレクタントと定義する。ここでのディレクタントは、経済や組織などとのしがらみが少ないことを指し、しがらみが少ないがゆえに作家は際立った世界意識、文学は人間についての継続的な臨床診断であり得る。ケステンがこのように展開するのは、作家を独裁に対抗する存在と位置付けたいからで、彼はディレクタントである作家が、アウトサイダーとして世界意識であるのと同時に社会の中心に立つ存在でもあるのだから、人々は作家の声に耳を傾けねばならないのだと主張する。さらにこの関係性ゆえに、作家は独裁の最初の犠牲者となるとする。ここで念頭に置かれているのは明らかに亡命文学者で、独裁政権に対する個人の闘いが想定されている。文学が常にそのように政治的なものであることを自覚せよというのがこの講演の趣旨である。

ケステンの想定する敵はアデナウアーやド・ゴールら権力者全般なのだが、そうした名を挙げた最後に、東ベルリンは今尚スターリンの影響下にあると断じている。そこには当然スターリンへの個人崇拜ではなく、個人崇拜を生む元となった共産党の官僚主義という意味でのスターリン主義への批判の眼差しが読み取れる。さらにケstenはタイトル中のニュルンベルクが他の都市でも構わないと語るが、言うまでもなくニュルンベルクは彼独特の解釈で革命的な街であり、³³スターリン主義にニュルンベルクに象徴される革命を対置する形で話が展開されている点に、反革命の共産党に対抗して革命の側に立っているというケステンの自己認識が再確認される。

3-2 共産党に対する三様の態度

「われらニュルンベルク市民」はケステンの作家としての責任感をよく伝えているし、また当時の課題を反革命的な共産党の官僚主義に見ていたこともわかる。そのことからすれば、マークとミドルウェイを除く主要な登場人物たちの全てが同じ共産党細胞の構成員である『あるモラリストの冒険』の主題は、共産党の官僚主義への反抗のはずである。

モラリストと共産党活動家とが対比されながらそこに大きな差別が見出せないのは、シュヴァルツバハはベッヒャー同様「独裁の官吏」ではあっても、自己保身のために他者を犠牲にする臆病な人間ではなく、むしろ肅清を恐れぬ人間だからだと言える。少し見方を変えれば、彼はケstenがしばしばモラリストと対比させるところの妥協に身を委ねた人間、例えば戦時公債に賛成

³³ この講演でも、ニュルンベルクを語る際には常にそうしたように、アルブレヒト・デューラーやニコラウス・コペルニクスやルートヴィヒ・フォイエルシハといったニュルンベルクゆかりの革命的著名人を紹介して、この街の革命性を強調している。

したオイゲン・バール博士や妥協に十指を委ねてしまったというエミリオ・ロンダーノ弁護士などとは正反対の人物であって、妥協しないという意味においてむしろモラリストに近い。

モラリストとの区別はミドルウェイ氏によって「理想主義者」という言葉でなされていた。ここでの定義は示されていないが、ヨーゼフ小説の完結編、1932年の『いかさま師』³⁴でも、モラリストのヨーゼフ・バールに対してカール・バロンが理想主義者と規定されている。バロンはバールに近い理念を抱きながらも、政治分析の甘さゆえにブルジョア政治組織に期待するという誤謬を犯し、それにより実践力においてバールに劣ることが証明されたのだった。同じアナロジーをピッポーにも適用するならば、バロンと並び主役だったアルベルト・シュティフターと同じ役割、即ち現実主義者だと見なし得る。³⁵

つまりこれは『いかさま師』最終章の再現として読めなくもない。政治的な判断力に欠けるシュヴァルツバハは肅清を受けて自らの理念を実現する機会を有さず、ピッポーは有能ではあっても彼には理念が欠けており、マークのみが理念の実現に向けて前進できる、というまとめが可能である。しかし、それは基本的な理解に留まる。

すでにシルヴィアの愛がこの三人の価値を等しくしていることは述べた。その点はシュティフターとバロンがいかさま師であるのに対してバールの方は大いにかさま師であった『いかさま師』とは大きく状況が異なる。シルヴィアの愛は組織活動から距離をとり続ける者と肅清を受ける者と共産党組織を離れた者との価値の等しさを保証する。ここに描かれているのは、共産党に対するあるべきスタンスの三様である。確かにそれを描くことは党派、とりわけ共産党に対するケステンへの敵対心に適い、個人主義者ケステンなりに作家としての責任を果たすことになるはずである。

3-3 モラリストの限界

個人が党に依存しないことの大切さはわかり易いが、しかし、なぜこの作品で、『いかさま師』の結末とは対照的に、モラリストが理想主義者と現実主義者の間に埋没するのか、という疑問は残る。作者自身は明らかにモラリストに肩入れしているのだから奇妙なことだ。

そこにはモラリストのディレクタント性が関わっているのだろう。「われらニュルンベルク市民」で展開された作家のディレクタント性をここに適用してみることが出来る。徹底的に自立した存在であるモラリストは、言うなればディレクタントだが、作家が最後のディレクタントであるならば、ディレクタントであるモラリストは作家でなくてはならない。彼の描くモラリストた

³⁴ Kesten, Hermann: *Der Scharlatan*. Göttingen 2000.

³⁵ 拙論「モラリストへの成長」を参照のこと。

ちが、職業としては文学研究者、小説家、ジャーナリストと常に文筆にかかわっているのは決して偶然でない。³⁶ 作家は予言者になり得て、その言葉には耳を傾ける価値があるにしても、作家自身が現実的な力を発揮するわけでなく、活動家を超越る存在でないのは致し方ない。だからこそ、ケステンハはベッヒャーへの公開書簡で「革命家」を宣言する前に「我々の世界では」と書き添えている。

モラリストの立場は憐いものであって、『いかさま師』でのパールは性愛のモラリストたる叔父の理解と経済的支えの下でモラリストであり続けることに成功している。多くの作品で様々に描かれているようにモラリストであることは困難で、パールがそれであり続けられるのは、彼を挫折させずに済むよう設定された特殊な環境の中でのことである。もちろん作者の側から救済策を出せばモラリストを前面に押し出すことは可能なので、この作品での埋没に必然性はないのだが、共産党の追従者への怒りからすれば、党に全く誘惑されることのないモラリストよりも、少なくとも一旦はそれに関わる人物たちが重要で、その結果として三者並列となったという説明が可能だろう。

モラリストの革命性について考察するために『あるモラリストの冒険』を取り上げたが、この作品に見られるのは、共産党の反革命に対するケステンナリの革命のあり方というよりはむしろ、共産党に屈従することのない自立した個人である。共産党活動家シュヴァルツバシは最後まで党の指令に従うが、しかし彼にしても肅清の恐怖に屈しないという意味で、共産党の官僚主義には依存しない。ケステンハは共産党を超克する革命家としてモラリストを描き出すのではなく、共産党に許容されない根っからの革命家と等しい価値を備える人物としてモラリストを描いた。ここでケステンハが、モラリストという困難な目標よりもむしろ、それぞれの立場において妥協しない姿に重点を置いて描いていることは、彼の理解する革命が、彼の拒絶する暴力革命論に對置し得る性質のものではなく、多々ある困難を乗り越え続けながらそれでも自らに誠実であることを意味するに過ぎないことを物語っている。ケステン的な意味において、モラリストは極めて革命的だが、一般的な意味での革命家にとって代わる存在ではあり得ないのである。

³⁶ 理性的なモラリストの手本に過ぎない性愛のモラリストはここでは除外して考えている。性愛のモラリストについては拙論「道徳的な女たち」を参照のこと。

Das revolutionäre Wesen von Moralisten

—Moralisten in der Literatur Hermann Kestens (3)—

TAKEDA Yoshiki

Klaus Mann charakterisierte Hermann Kesten als „monoton grimmigen Antikommunismus“. Kesten hasste zwar kommunistische Parteien, aber liebte revolutionäre Personen oder Sachen. 1957 schrieb er einen öffentlichen Brief an den Kulturminister der DDR, Johannes R. Becher, und tadelte sein Verhalten bei den Verhaftungen von Walter Janka und anderen. In dem Brief behauptete er, dass ein unabhängiger Schriftsteller wie Kesten ein Revolutionär ist.

Die Kesten-Affäre ist berühmt in dem Gebiet der Uwe Johnsons Forschungen. 1961 hielt Kesten in Mailand einen Vortrag und kritisierte dabei Bertolt Brecht, der unter Walter Ulbricht arbeitete. Sofort verteidigte Johnson Brecht. Aber der Veranstalter des Vortrags ließ diese Debatte abbrechen und deswegen konnten sich Beide, Kesten und Johnson, gegenseitig nicht verstehen. Von Grund auf hasste Kesten die DDR und die Gruppe 47, genauer gesagt, sein Hass richtete sich auf Organisationen, die unvermeidbar Diktatur mit sich bringen müssen.

Im gleichen Jahr, 1961, publizierte er den Roman „Die Abenteuer eines Moralisten“. In dem Roman gehören fast alle Personen zu einer kommunistischen Zelle und zwei Männer mit dem gleichen Namen Franz werden miteinander verglichen. Auf der einen Seite der die kommunistische Partei hassende, die deutsche Literatur studierende Moralist und auf der anderen Seite der an Stalin glaubende Revolutionär. Normalerweise stehen in Kestens Romanen Moralisten auf der höchsten Stufe, aber der moralische Franz bleibt auf dem gleichen Niveau mit dem revolutionären Franz.

Seine Ansprache, die er 1961 zur Hauptversammlung des Deutschen P.E.N.-Zentrums in Nürnberg hielt, erleichtert das Verständnis des Romans. In der Rede definierte er Schriftsteller als die letzten Dilettanten, die von der Wirtschaft unabhängiger als andere Arbeiter sind. Weil ein Dilettant ein Außenseiter der

Gesellschaft ist, kann er die Gesellschaft objektiv beobachten und die Zukunft vorhersagen. Hier entsteht die politische Verantwortlichkeit des Schriftstellers. Er erwähnte dazu noch den Schatten von Stalin in Ostberlin und revolutionäres Wesen der Stadt Nürnberg, damit stellte er sein eigenes revolutionäres Wesen dem Stalinismus gegenüber.

In dem Roman treten drei verschiedene Menschentypen auf, der Moralist, der Idealist und der Realist. Alle halten auf ihre eigene Art Distanz zu kommunistischen Parteien. Besonders der Idealist, der kommunistische Franz, schmeichelt nicht der Partei und erleidet deswegen die Säuberung. Kesten machte aus seinem Verantwortungsbewusstsein heraus dreiartige Widerstände gegen kommunistische Parteien zum Thema dieses Romans.

Kestens Moralist, ein von Grund auf unabhängiger Mensch, ist nicht einflussreich. Weil er ein Dilettant ist, kann er kein richtiger Revolutionär sondern höchstens ein Prophet werden. Das spiegelt der Roman, der den Moralisten mit dem Revolutionär gleichsetzt.

Wegen seiner Unabhängigkeit ist Kestens Moralist revolutionär, doch kann er nicht an die Stelle des kommunistischen Revolutionärs treten.